

上代特殊仮名遣いイ列・エ列音の頻度と
後代における仮名の字母

人文学部日本文化学科

三輪凜太郎

2021（令和）年月提出

要旨

本論文の目的は、奈良時代の文献に見られる万葉仮名として使われる漢字のうち、後代の仮名の字母として採用された漢字について、その漢字が採用された要因を検討することである。

松本（1995）と早田（2017）はともに、出現頻度の高い万葉仮名が後代の仮名の字母として採用されるとしている。しかし、両者はともに、上代特殊仮名遣いの甲乙二類の区別、特にオ列音の区別についての音韻的な解釈を中心とした研究であり、それ故、オ列音のみを取り上げた研究で、辞典ベースでの異なり数を元にした議論に止まっている。また、「甲類」対「乙類」という対立でのみの議論であり、個別の万葉仮名の頻度についての検討はしていない。

それを受けて、本論文では、甲乙の区別がある音節のうち、松本や早田が取り上げなかったイ列・エ列音を対象にして、辞典での異なり数ベースでの甲乙二類の頻度の違いと、実際の文献上に見られる延べ数ベースでの個別の万葉仮名の出現頻度を調査する。

結論として、異なり数・延べ数の違いにかかわらず、出現頻度が必ずしも後代において仮名の字母として採用されるか否かとは関係しないことを明らかにする。

目次

1	はじめに.....	1
1.1	本論文の目的.....	1
1.2	本論文の構成.....	1
2	先行研究のまとめ.....	2
2.1	上代特殊仮名遣いオ列甲乙における万葉仮名の出現頻度と後代の仮名の字母の関係.....	2
2.2	問題の所在.....	2
3	イ列音とエ列音の頻度の調査.....	3
3.1	調査方法.....	3
3.2	異なり数の調査結果と考察.....	3
3.3	延べ数の調査結果.....	4
3.3.1	イ列音.....	4
3.3.2	エ列音.....	7
3.3.3	延べ数での出現頻度のまとめ.....	11
3.4	調査結果のまとめ.....	11
4	おわりに.....	12
4.1	本論文のまとめ.....	12
4.2	今後の課題.....	12
	参考文献.....	12

1 はじめに

1.1 本論文の目的

本論文の目的は、奈良時代の文献に見られる万葉仮名として使われる漢字のうち、後代の仮名の字母として採用された漢字について、その漢字が採用された要因を検討することである。具体的には、その漢字の出現頻度が字母としての採用のあり方に関係するという先行研究に対して、必ずしも漢字の出現頻度は関係ないということを明らかにする。

本論文で対象とするのは、イ列音とエ列音の仮名である。特に、甲乙二類に書き分けられる上代特殊仮名遣いのイ列 (ki, pi, mi, kwi, pwi, mwi¹) 音とエ列 (kye, pye, mye, ke, pe, me) 音を表す万葉仮名の中から、平仮名の「き・ひ・み・け・へ・め」の字母となる漢字が選ばれる過程を取り扱う。

1.2 本論文の構成

2章で上代特殊仮名遣いのオ列音に使われた万葉仮名としての漢字の出現頻度と後代の仮名の関係について論じた先行研究を紹介した上で、本論文で扱う問題の所在を明らかにする。3章で「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」(国立国語研究所 2018)の単語リストを用いてイ列音とエ列音の異なり数を調査した結果と、原文を用いてイ列音とエ列音の仮名の述べ数を調査した結果を述べる。4章で本論文のまとめをする。

¹ 本論文では、特に断らない限り Frellesvig-Whitman 式の綴り方を使用している。

音節のタイプ	添字表記法	大野	Frellesvig & Whitman
甲類	Ci ₁	Ci	Ci
乙類	Ci ₂	Ci	Cwi
無区別	Ci	Ci	Ci
甲類	Ce ₁	Ce	Cye
乙類	Ce ₂	Cë	Ce
無区別	Ce	Ce	Ce
甲類	Co ₁	Co	Cwo
乙類	Co ₂	Cö	Co
無区別	Co	Co	Co

国立国語研究所 (2018) 「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」(Version 2020.1)
<https://oncoj.ninjal.ac.jp/> [2021年1月6日アクセス]

2 先行研究のまとめ

2.1 上代特殊仮名遣いオ列甲乙における万葉仮名の出現頻度と後代の仮名の字母の関係

松本（1995:102-105）は、『時代別国語大辞典上代編』（1967）を用いた調査の結果、上代特殊仮名遣いオ列甲乙の出現頻度は、甲類（Co）が24.6%であり、乙類（Cö）が75.4%であることを示した。また、松本（1995）は、大野（1974）など従来の国語学における考え方は、上代特殊仮名遣いのオ列音のうち、“単純・純粹”な甲類²（Co）の母音の方が音声的に無標であり、“中舌的”な乙類（Cö）の母音が音声的には有標だと考えられることを指摘した上で、その音声的に無標な母音を含む甲類（Co）の方が出現頻度が低く、数の上から見ると甲類の方が有標になることを問題視する。さらに松本は、後代のオ列音を表す仮名として採用されたのは、甲乙の区別がある音節ではすべて乙類の文字であり、オ列音は、音声的に有標な乙類に合流したと考えられることになることを指摘する。松本は、以上のことを元にして、大野（1974）など従来の国語学における上代特殊仮名遣いの解釈を疑問視する。

一方、早田（2017:3-12）は、頻度の高い文字が字母になるという松本（1995）の主張は正しいとした上で、上代特殊仮名遣いのオ列乙類の出現頻度が甲類に比べて高く、数の上では無標であるのに、その母音が音声的に有標であることは必ずしも問題とはならないとする。早田は、日本祖語の*eが上代語でiに、祖語の*oが同じくuに、祖語の*eeが同じくeに、祖語の*ooが同じくoになったとする服部（1979:98）の仮説を紹介する。この服部の仮説によれば、日本祖語の段階において弁別的に長い母音を含む音節が上代語のオ列甲類になったということになる。一方、上代語のオ列乙類の起源としては、日本祖語の長母音**æ*も短母音**ǣ*もあり得た。一般には、長母音が有標であり、短母音が無標であることを考えると、祖語の長母音（および二重母音）にのみ遡るオ列の甲類の頻度が低くなるのは自然であるとする。

2.2 問題の所在

松本（1995）と早田（2017）はともに、出現頻度の高い万葉仮名が後代の仮名の字母として採用されるとしている。しかし、両者はともに、上代特殊仮名遣いの甲乙二類の区別、特にオ列音の区別についての音韻的な解釈を中心とした研究であり、それ故、オ列音のみを取り上げた研究で、辞典ベースでの異なり数を元にした議論に止まっている。また、「甲類」対「乙類」という対立でのみの議論であり、個別の万葉仮名の頻度についての検討はしていない。

それを受けて、本論文では、甲乙の区別がある音節のうち、松本や早田が取り上げなかったイ列・エ列音を対象にして、辞典での異なり数ベースでの甲乙二類の頻度の違いと、実際の文献上に見られる延べ数ベースでの個別の万葉仮名の出現頻度を調査する。結論として、異なり数・延べ数の違いにかかわらず、出現頻度が必ずしも後代において仮名の字母として

² 2章の先行研究のまとめでは、大野式の綴り方を使用する。

採用されるか否かとは関係しないことを明らかにする。なぜ延べ数ベースの調査を行うかという点、「甲類」対「乙類」という対立でのみ考えた場合、仮に「甲類」を含む単語が多かったとしても、個別の万葉仮名の出現頻度を見ると、「乙類」の万葉仮名のうちのひとつが全体として出現頻度が一番高い、ということがあり得るかもしれないからである。

3 イ列音とエ列音の頻度の調査

3.1 調査方法

調査は以下の2通りの調査を行なった。まず、異なり数の調査として、「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」の単語リストを用いて、イ列 (ki,pi,mi,kwi,pwi,mwi) 音とエ列 (kye,pye,mye,ke,pe,me) 音を含む単語数を調査した。

次に、各万葉仮名の延べ数を調査するため、上述のコーパスを用いて、イ列 (ki,pi,mi,kwi,pwi,mwi) 音とエ列 (kye,pye,mye,ke,pe,me) 音に対応する仮名としての万葉仮名が文献上に実際どれだけ出現するかを調査した。なお、『万葉集』については、主に仮名で記されている5・8・15~20巻のみを対象とした。

「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」の収録作品とその省略

古事記歌謡 (KK); 112 歌; 2,527 語; 712 年成立

日本書紀歌謡 (NSK); 133 歌; 2444 語; 720 年成立

風土記歌謡 (FK); 20 歌; 271 語; 730 年代成立

仏足石歌 (BS); 21 歌; 337 語; 753 年以降成立

萬葉集 (MYS); 4,685 歌; 83,706 語; 759 年以降成立

続日本紀歌謡 (SNK); 8 歌; 134 語; 797 年成立

上宮聖徳法王帝説 (JSHT); 4 歌; 60 語; 成立年不明

3.2 異なり数の調査結果と考察

上述の方法で調査した結果、以下のような結果となった。

(1) イ列音を含む単語の調査結果

甲類を含む単語は 1127 語 (86.9%), 乙類を含む単語は 168 語 (13.1%)

a. ki を含む単語は 375 語, kwi を含む単語は 96 語

b. pi を含む単語は 329 件, pwi を含む単語は 35 件

c. mi を含む単語は 423 件, mwi を含む単語は 37 件

(2) エ列音を含む単語の調査結果

甲類を含む単語は 156 件 (28.7%)，乙類を含む単語は 387 件 (71.3%)

d. kye を含む単語は 30 件， ke を含む単語は 160 件

e. pye を含む単語は 90 件， pe を含む単語は 109 件

f. mye を含む単語は 36 件， me を含む単語は 118 件

上記から分かるように，出現頻度としては，イ列においては甲類の頻度が圧倒的に高い一方で，エ列の「ケ・ヘ・メ」は乙類の頻度が高い。甲乙二類のうち，頻度が高い方が後代の仮名の字母になるという早田 (2017) の主張が正しいのであれば，イ列音においては甲類が，エ列音においては乙類が，後代の仮名の字母として採用されると予測される。

築島裕 (1981:250-257) によると，イ列・エ列の仮名の字母となる万葉仮名は，「き」は「幾」，「ひ」は「比」，「み」は「美」，「け」は「計」，「へ」は「部」，「め」は「女」である。このうち，「き」の字母のみが乙類であり，「ひ・み・け・へ・め」の字母は甲類である。つまり，早田 (2017) の主張通り，頻度が高い方が後代の仮名の字母となった例は「ひ」と「み」のみであり，残りの「き・け・へ・め」は頻度が低い方が後代の仮名の字母となった。従って，辞典での異なり数ベースでの出現頻度は，必ずしも後代の仮名の字母として採用されるか否かとは関係しないということになる。

3.3 延べ数の調査結果

3.3.1 イ列音

キの甲類 (ki) と乙類 (kwi)

ki の出現頻度が kwi よりも圧倒的に高く，3.2 節の異なり数の頻度と同じ結果であった。しかし，後代の仮名の字母となる「幾」は 1 件のみであった。

表 1

キ 甲 ki	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
伎	11	1	0	5	71	6	182	4	33	103	53	214	0	1	684
岐	4	1	0	150	16	0	0	0	4	0	0	4	23	2	203
支	0	2	4	0	0	0	0	1	0	12	0	0	0	1	20
企	0	5	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	22	0	35
耆	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	14	0	15
紀	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	3
吉	0	0	0	0	30	5	36	2	80	50	9	31	1	0	244
枳	0	0	0	0	11	2	2	0	13	23	0	12	98	0	161
寸	0	0	0	0	0	9	0	9	0	0	0	0	0	0	18

祁	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
祇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
氣	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
合計	15	10	4	156	135	22	220	17	129	189	62	262	163	4	1388

表 2

キ乙 kwi	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
紀	0	0	0	23	7	0	0	0	2	0	1	0	13	0	46
帰	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
疑	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
貴	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
奇	0	0	0	0	0	0	14	0	24	11	9	12	0	0	71
寄	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
宜	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
城	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	3
綺	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
木	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	4	0	0	0	9
機	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
幾	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
己	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
基	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4
氣	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
合計	0	2	0	26	7	8	15	1	27	12	14	12	21	1	146

ヒの甲類 (pi) と乙類 (pwi)

pi の出現頻度が pwi よりも圧倒的に高く、3.2 節の異なり数の頻度と同じ結果であった。また、後代の仮名の字母となる「比」は 878 件であり、乙類のものが 1 件のみあったが、残りの 877 件は甲類であった。

表 3

と甲 pi	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
比	21	9	1	126	109	3	124	8	129	104	38	137	65	3	877
毘	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	6
日	0	0	0	0	2	7	1	0	0	0	5	0	0	0	15
必	0	0	0	0	6	0	1	0	0	1	0	0	1	0	9
氷	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	6
負	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
斐	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
譬	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	10
臂	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	0	18
避	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	5
毗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
豐	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
非	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計	21	9	1	127	117	10	126	16	129	105	43	138	107	3	952

表 4

と乙 pwi	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
非	0	2	0	0	1	0	31	0	9	11	2	16	0	0	72
斐	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
比	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
肥	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
悲	0	0	0	0	0	0	6	0	20	2	0	0	1	0	29
火	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
被	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
彼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4
合計	0	2	0	14	1	0	37	1	29	13	2	16	7	0	122

ミの甲類 (mi) と乙類 (mwi)

mi の出現頻度が mwi よりも圧倒的に高く、3.2 節の異なり数の頻度と同じ結果であった。

また、後代の仮名の字母となる「美」は 774 件であった。

表 5

ミ 甲 mi	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
美	23	6	8	78	83	12	129	3	15	112	51	231	12	11	774
弥	2	8	2	2	9	0	2	3	12	6	3	4	38	1	92
見	0	0	0	0	1	5	1	2	0	4	5	2	0	0	20
三	0	0	0	0	0	5	0	3	1	0	3	1	0	0	13
民	0	0	0	0	1	0	0	0	4	1	2	0	0	0	8
瀾	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	108	0	108
合計	25	14	10	80	94	22	132	11	32	123	64	238	158	12	1015

表 6

ミ 乙 mwi	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
微	3	0	0	15	1	0	0	0	0	0	0	0	4	0	23
味	0	1	0	1	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	5
尾	0	0	0	0	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
見	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3
未	0	0	0	0	4	0	24	0	19	12	4	15	6	2	86
末	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
米	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
廻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
合計	3	1	0	16	22	0	24	3	22	12	7	15	10	2	137

3.3.2 エ列音

ケの甲類 (kye) と乙類 (ke)

kye は 57.9%, ke は 42.1% で甲類の出現頻度の方が若干高く、3.2 節の異なり数の結果と逆転した。しかし、後代の仮名の字母となる「計」は 12 件であり、頻度が高いとは言えない。

表 7

ケ甲 Kye	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
禰	4	2	0	36	0	0	1	0	0	0	0	7	2	0	52
家	1	0	0	0	35	22	55	1	51	26	26	37	1	0	255
鷄	1	1	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	19	0	28
氣	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
計	0	0	0	0	6	0	1	4	0	0	0	0	1	0	12
谿	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
介	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
氣	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
價	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
稽	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4
啓	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
合計	6	4	0	36	41	29	57	6	52	29	27	45	29	0	361

表 8

ケ乙 Ke	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
氣	1	6	0	26	15	0	30	0	40	28	0	58	2	2	208
氣	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	18	0	1	0	22
家	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
伎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
階	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
戒	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
既	0	0	0	0	7	0	0	0	0	1	0	0	2	0	10
凱	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
開	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	8
皚	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
該	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	8
合計	1	7	0	26	22	1	31	1	40	29	18	60	25	2	263

への甲類 (pye) と乙類 (pe)

pye は 55.4%, pe は 44.6% で甲類の出現頻度の方が若干高いが、差は小さい。3.2 節の異なり数は乙類の頻度が高いが、同様に差が小さいので結果が逆転したとは言い難い。また、後代の仮名の字母となる「部」は 3 件のみであった。

表 9

へ 甲 pye	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
部	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	3
覇	3	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3	0	8
幣	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	11	1	15
弊	0	5	0	29	15	0	0	0	1	4	0	23	4	0	81
徹	0	0	0	0	1	0	57	0	39	29	1	25	0	0	152
辺	0	0	0	0	2	0	2	0	3	1	0	0	0	0	8
反	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	6
平	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
隔	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
曾	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
弁	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4
陛	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	17	0	18
杯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
稗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4
倍	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
合計	3	6	0	31	21	2	65	2	43	35	2	53	41	1	305

表 10

へ 乙 pe	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
閉	8	1	0	19	7	2	0	0	1	0	0	8	3	0	47
倍	0	0	0	1	17	0	29	3	25	31	15	43	8	0	182
徹	0	0	0	0	0	10	2	0	0	0	0	0	0	0	2
陪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	11
珮	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

沛	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
杯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
合計	8	1	0	20	24	10	31	3	26	31	15	51	26	0	246

メの甲類 (mye) と乙類 (me)

mye は 23.4%, me は 76.6% で乙類の出現頻度の方が高く, 3.2 節の異なり数の頻度と同じ結果であった。しかし, 後代の仮名の字母となる「女」は 6 件のみであった。

表 11

メ 甲 mye	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
賣	2	2	0	24	0	0	4	0	0	16	4	14	3	2	71
米	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
面	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
女	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	1	0	0	0	6
売	0	0	0	0	10	0	0	0	10	0	0	0	0	0	20
謎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	10
咩	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	2	0	9
綿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
合計	2	2	0	24	19	0	4	1	10	20	5	14	18	2	121

表 12

メ 乙 me	BS	FK	JSHT	KK	MYS5	MYS8	MYS15	MYS16	MYS17	MYS18	MYS19	MYS20	NSK	SNK	合計
米	12	2	1	36	34	5	31	7	41	44	24	56	0	2	295
面	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
目	0	0	0	0	0	6	0	5	0	2	2	0	0	0	15
身	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
梅	0	0	0	0	34	0	0	0	0	2	0	4	29	0	69
馬	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
俛	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
賣	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1

味	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
妹	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
毎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	7
迷	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
合計	12	2	1	36	69	11	32	13	41	48	26	63	40	2	396

3.3.3 延べ数での出現頻度に関するまとめ

出現頻度としては、イ列においては異なり数について見たのと同じく甲類の頻度が圧倒的に高かった。一方、エ列については、「ケ・へ」の場合は異なり数について見たのとは逆に甲類の方が僅かに頻度が高く、エ列の「メ」のみ乙類の頻度の方が高かった。

また、個別に後代の仮名の字母となった漢字の出現頻度を見ると、「ひ」の「比」と、「み」の「美」はそれぞれの音節で一番頻度が高かった。しかし、「き」の「幾」, 「け」の「計」, 「へ」の「部」, 「め」の「女」は出現頻度がかなり低かった。このことから、実際の文献における延べ数ベースでの出現頻度も、後代の仮名の字母として採用されるか否かとは関係しないと言える。

3.4 調査結果のまとめ

異なり数・延べ数の違いにかかわらず、出現頻度が必ずしも後代において仮名の字母として採用されるか否かとは関係しなかった。

辞典での異なり数ベースでの甲乙二類の頻度としては、イ列においては甲類の頻度が圧倒的に高い一方で、エ列の「ケ・へ・メ」は乙類の頻度が高かった。イ列・エ列の仮名の字母となる万葉仮名は、「き」の字母のみが乙類であり、「ひ・み・け・へ・め」の字母は甲類である。「ひ」と「み」は頻度が高い方が後代の仮名の字母となった。しかし、「き・け・へ・め」は頻度が低い方が後代の仮名の字母となった。

実際の文献上での延べ数ベースでの個別の万葉仮名の出現頻度を見ると、「ひ」の「比」と、「み」の「美」はそれぞれの音節で一番出現頻度が高かった。しかし、「き」の「幾」, 「け」の「計」, 「へ」の「部」, 「め」の「女」は出現頻度がかなり低かった。

出現頻度が高い万葉仮名が必ずしも後代の仮名の字母として採用されるとは限らないならば、どのような要因で後代の仮名の字母が選定されたのかという疑問が生じる。そこで、延べ数ベースでの出現頻度が低いにもかかわらず、後代の仮名の字母として採用された「き」の「幾」, 「け」の「計」, 「へ」の「部」, 「め」の「女」について見ると、特に「け」の「計」, 「へ」の「部」, 「め」の「女」は、同じ音節の出現頻度が高い万葉仮名に比べ、画数が少ないことが分かる。ここから、「画数の少なさ」が後代の仮名の字母としての選択に関係していることが示唆されるが、詳細は不明である。

4 おわりに

4.1 本論文のまとめ

本論文は、奈良時代の文献に見られる万葉仮名として使われる漢字の出現頻度が後代の仮名の字母としての採用のあり方に関係するという先行研究に対して、必ずしも漢字の出現頻度は関係ないということを明らかにした。さらに、出現頻度が低いにもかかわらず後代の仮名の字母となった漢字は、画数が少ないことも指摘した。

4.2 今後の課題

本論文では、「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」を用いて調査を行った。その際、濁音の万葉仮名は扱わず、調査範囲を清音のみに絞った。しかし、濁音の万葉仮名が、後代の仮名における字母と全く関係ないと言い切る根拠がないため、今後、濁音の万葉仮名も扱って再度調査を行う必要がある。

また、実際の文献を用いて調査を行っていないため、文献の特色や、万葉仮名が使用されている和歌の内容などについては言及していない。そこに後代の仮名の字母としての採用のあり方の要因がある可能性もある。従って、今後は実際の文献を用いて上代特殊仮名遣いの現れ方を調査する必要がある。

参考文献

- 国立国語研究所 (2018) 「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」 (Version 2020.1)
<https://oncoj.ninjal.ac.jp/> [2021年1月6日アクセス]
- 築島裕 (1981) 『日本語の世界 5 仮名』 中央公論社
- 服部四郎 (1979) 「日本祖語について (21)」 『月刊言語』 11月号, 8 (11) :97-107
- 早田輝洋 (2017) 『上代日本語の音韻』 岩波書店
- 松本克己 (1995) 『古代日本語母音論 上代特殊仮名遣の再解釈』 ひつじ書房